

監修・解説

石川 松太郎

家庭教育

文献叢書

全18卷



クレス出版

監修のことば

日本女子大学教授
教育史学会代表理事

石川 松太郎

わたしたち日本人の多くは、第二次世界大戦の終結を契機に、天皇制家族国家観を克服して直系制家族制度にもとづく「家」観念の払拭に努めるのとともに、民主主義の社会体制にふさわしく、家族を構成するすべての人びとが自由と平等の立場より家庭生活の存続と発展に貢献することの重要性に目ざめるようになった。その効果は、日本人の家庭教育が、その理念においても実態にあっては、戦前とはまったくの「さまがわり」となって、今日に顕現しているように見られる。

たしかに、家庭教育の構造・機能そして様態が、時代や社会により変容する事實は疑いなく、時代や社会を超えてそのまま伝承されたり、変容するにしてもきわめて徐々にしか行われぬ側面が少なくない点にも留意しておかなくてはならない。両親らによる子どもの養育が、衣食住などの日常生活にかかわって行われるがゆえに、伝統的な慣行の無視や変改は許されない。また、

家庭教育では、意図的・合理的・計画的な指導とともに、無意図的・情緒的・偶発的な影響も無視できない。このように、時代や社会による急激な変容の側面と、時代や社会を超えた伝承の側面とが、複雑にからみ合っているのが家庭教育の大きな特徴といえよう。

今回、ここに復刻される二五点（一八巻）の文献は、明治初年より昭和二〇年にいたる日本の近代において公刊された家庭教育論の代表的な著述である。論旨の理念や記述の内容において多彩であるけれども、いずれも、大なり小なり日本の家庭教育が抱えた「近代なるがゆえに」の側面と「近代にもかかわらず」の側面とを併せて考察し、将来のありようを真摯に構想しているのが共通の特徴といえる。監修者としては、この「家庭教育文献叢書」が、家庭教育のみでなく、女子教育・幼児教育・生涯教育などにもたずさわる人びとのあいだでも広く使われ役だてられることを、ひそかに期待している。

推薦のことば

本叢書の刊行を大いに歓迎する

日本保育学会会長

荘司 雅子

人間は教育によってのみ人間になるというカントの言葉通り、教育によって人間は人間らしくなれる。その教育は誰によって、どこで何時始められるか。いうまでもなく誕生と同時に家庭で母によって、父によって行われる。人間の最初の教師は母であり、最初の学校は家庭である。学校教育を受ける前に子どもは家庭教育を受ける。その家庭教育によって人間の性格や社会生活に必要な習慣が形成される。この基礎教育が人間の後の生活を支配する。この点で人格形成に關しては学校教育よりも家庭教育が重視されてきた。

この度石川松太郎博士の監修により、明治8年から昭和20年に刊行された家庭教育文献叢書が、クレス出版から発行されることはきわめて有意義である。過去を顧みることがは現在を知り、未来を展望することである。「温古知新」という言葉もある通り、われわれの先輩の家庭教育が各時代の人間を如何に形成したかを知ることによって今日そして未来の教育を知り、展望することができる。この点から家庭教育文献叢書の刊行を大いに歓迎するものである。

日本の家庭教育を根底から 問い直すために

日本教育社会学会会長
立教大学教授

山村 賢明

家庭教育の実質は、ほとんど家族の日常生活における子供の社会化である。このことは、家庭教育を考える上での、基本的認識でなければならない。

社会化であるからこそ、家庭教育はその社会の伝統的な基層文化を、子供たちに幼いうちに植えつけるのであり、またいくら新しい家庭教育をしようと思意的に努力しても、容易なことでは変えることはできないのである。この変動のほげしい現代において、家庭教育の危機が叫ばれ、新しい家庭教育のあるべき姿が求められて久しい。しかし家庭教育の本質を社会化としてみると、今もつとも必要なことは、家庭教育の根底に潜む日本文化の特質をも含めて、過去に遡ってこれまでの日本の家庭教育のあり方とその捉え方を、根本的に検討し直してやることであろう。

そのような意味で、今ここに、日本教育史の代表的研究者であられる石川松太郎氏の監修のもとに、『家庭教育文献叢書』が刊行されることになったのは、極めて時宜にかなったことといわなければならない。この全18巻には明治から第二次世界大戦終結までの、日本の家庭教育に関する基本的文献がほとんど全て網羅されている。家庭教育に関心をもつ各層に、広く購読をおすすめする次第である。

家庭教育文献叢書 全18巻構成

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1						
皇国家庭教育読本	家の道	国民学校と家庭教育	日本の家庭教育	家庭教育(小西博士全集4)	家庭教育と学校教育(家庭教育指導叢書10)	家庭教育(岩波講座 教育科学10)	幼児より家庭教育的実際(成年まで)	桃太郎主義の教育(縮刷名著叢書9)	家庭改良と家庭教育	家庭教育講話	家庭教育	家庭教育学	小学校に連絡せる家庭の教育	家庭教育の実験	新家庭訓(家庭百科全書)	親の罪 一名家庭教育批評	家庭教育講話	家庭教育(家庭叢書四)	家庭教育	博覧会見聞録別記子育ての巻			
昭和17年/昭和教育社	昭和17年/中文館書店	昭和16年/日本両親再教育協会	昭和15年/新小説社	昭和10年/玉川学園出版部	昭和17年/文部省社会教育局	昭和7年/岩波書店	昭和6年/先進社	大正4年/東亜堂書房	大正6年/目黒書店	大正12年/目黒書店	大正13年/児童保護研究会	大正6年/目黒書店	明治44年/敬文館	明治41年/家庭之友社	明治40年/博文館	明治40年/金港堂	明治36年/静岡市教育会	明治27年/民友社	明治20年/金港堂	明治8年/博覧会事務局			
公手 喜代史著	戸田 貞三著	阪本 一郎著	岡村 匡造著	小西 重直著	倉橋 惣三著	倉橋 惣三著	野瀬 寛顕著	巖谷 小波著	佐々木吉三郎著	小川 正行著	市川 源三著	野瀬 寛顕著	山松 鶴吉著	堀田 相爾著	羽仁 もと子著	三土 忠造著	高島 平三郎著	利根川 與作著	小池民次・高橋秀太輯	近藤 真琴著			
文部省は家族制度に基く家庭教育要項五条二十五項を発表した。本書は之に準據して、如何にして日本の理想的翼賛家庭を作るべきか、皇国の道に則り美しき徳性と性格を養う家庭教育を行ふべきか説いている。	家に関する事実、家の持つ特質に深く根ざしての論は本書の特色であり、戦時家庭教育の指導書としてだけでなく、真に家が何であるかを教えてくれる書。	国民学校の精神を説き、従来の家庭教育を反省せしめ、新に家庭教育を根本的に立て直さなければならぬことを感ぜしめると共に家庭教育の構造内容を豊かに示している。	上篇日本独特の家庭教育、中篇親の心得べき事項、下篇家庭教育の実際の三篇より成り、日本家庭教育のあるべき姿を解り易く教えている。	母の母性愛によるその子供の理解、子供の方から言えば、世話をしてくれることによって生まれる母に対する愛慕と信頼はみな母性の教育力をして充分にその力を発揮する。教育の本質、文化・自然の關係等詳しく論述、『母のための教育講話』	家庭教育の本義を中心に再認識し、健全なる家庭生活の建設、母の自覚、母の人的教養の向上を強調している。『教育科学』より転載。	家庭教育と学校教育との關係は、国の子の教育が、一方だけでは到底出来ないということにある。そして、先づ、もととしての家庭教育の尊重と自省とが、此の關係を正しく実現させる第一要件である。	祖先中心の家庭教育の精神に基き、心理学、社会学、教育学等の基礎学を参考とし、自身の教育の経験を反省、整理して、家庭教育の目的・順序・實際問題を組織的に述べている。	富士が日本一として理想的な山容を備えている如く、桃太郎もまた日本一として理想的なお伽噺である。その桃太郎を仮つて、著者の国民教育に関する意見をまとめたもの。	一国の興隆には、体力、智力、徳力、富力の四大原動力が充実することで、四者共根底は家庭にある。国を磐石にするための出発点として「家庭の改良より始めよ」という断案に達して、家庭教育を見聞した事、感じた事をまとめたもの。	旧来の家庭教育法は、其の理論に於ても實際に於ても、共に現代科学の基礎を欠いていた。著者は児童研究の進歩に基づき、家庭教育の主義方法を論述し、「母の教科書」を世に提供した。	科学と芸術と道徳との創作に人間を向上させていくことが即ち教育であり、その方法として勤勞、学習、遊戯がある。これらを実践するには両親が教育するのが一番である点から「家庭教育」について詳細に述べている。	軟鞭教育をよく調和して、世の子弟を一般市民としての普通の常性を備えた上に、更に偉大なる氣風と能力を保つよう人物に仕立てあげようとする目的で書かれたもの。	学校教育だけでなく実績を挙げることでできない児童の教育を、教育者の側から要求する所の家庭教育に関する注文注意。	教育の学理を研究し、その實際に従事した著者が、家庭教育研究の必要を感じ、組織的・系統的に論述した大著。	英国の家事読本『ドメスチック・エコノミー・リーダー』を訳したもの。日常の家庭生活の實務を小説風に面白く書いている。	人間の進歩発展は教育を除いては期待できない。国家の興廢を決する国民教育の基礎は家庭にあり、その責任を負うて居るのは母親である。日清日露の戦争に勝ち、世界の強國に仲間入りし、益々の発展をするために、婦人が教育上の知識を備えるために書かれた書。	「子供は善となく悪となく皆心に染み入りて長く消え失せず、善き事を習わせばよくなり、悪き事を習わせばあしきなる」。父母の保育法や教え方の大切さを、体育・智育・徳育に分けて詳細に収めている。	家庭の教育は、人事の模範的実例を児童に示し、人類に対する同情の念を起さしめ、家庭に於ける風儀及動作の如何を知らしめる。故に家庭は教育場というより、児童が始めて社会の生活を知り且つ試みる実験場だとする。	人物養成には、小学校教育のように一定の形式、一様の模型に入れて教授するのではなく、児童の個性を研究し、其の性質に応じて、特殊の教育を施す必要性から、家庭教育の原理と方法を記す。	文明が進むなか、一つのものが発達するのでなく、事業や學術、衛生医療といふように多方面で進むことが万全の国といえる。教育に於いても、学校教育が進むなか、教育の根本は家庭にある。高島氏が静岡市教育会第五回夏期講習会で講演した記録。	教育者の立場から見て、子弟の教育上、父母の落度と思われる件々を指摘して、父母たる人々に反省を求めるとともにまとめた書。	最も幸福なるは家庭団欒、そして最も重要な家庭を主るものは婦人という点から、婦人、女子を中心にまとめた書。	『育児の要』の続篇といふべき書、著者が自分の子供を「人格の完成」「能力の開発」とに努めて育てていく間に、感じたことを記しあつめたもの。

家庭教育文献叢書

●全18巻 解説付

石川 松太郎 監修・解説

家族が家庭で子どもに基本的な養育と社会化を行う「家庭教育」は、子どもの人格形成に重要な役割をもち、教育の基本である。本叢書は「家庭教育」に関する明治より昭和20年（終戦）まで発表された文献を鳥瞰できるように纏め、社会変化とともに「家庭教育」がどのように変わってきたのか明らかにするものです。

■ A5判 / 上製函入 / クロス装 / 各巻解説付

■ 第一回配本全9巻（第1巻～第9巻）

平成2年4月25日刊 揃定価八六、五二〇円

（本体八四、〇〇〇円）

■ 第二回配本全9巻（第10巻～第18巻）

平成2年9月25日刊 揃定価八八、五八〇円

（本体八六、〇〇〇円）

※分売は致しませんのでご了承ください。



§ クレス出版好評既刊書

「家族・婚姻」研究 文献選集 戦前篇

●全15巻 / 別巻1 別冊解題付

湯沢 雍彦 監修

本文献選集は、人類社会において永遠のテーマであり、現在一般の関心も高い「家族」の問題を、それに係わる婚姻、親子、婦人、離婚等を含めて、社会学・人類学・教育社会学・経済学・法制史学・民俗学等あらゆる分野から研究できるように精選し、集成了なものです。

全巻構成

- | | | |
|----|---------------------------|--------|
| 1 | 増補 族制進化論 | 有賀 長雄 |
| 2 | 隠居論 | 穂積 陳重 |
| 3 | 子供本位の家庭 | 安部 磯雄 |
| 4 | 離婚制度の研究 | 穂積 重遠 |
| 5 | 家族制度と婦人問題 | 河田 嗣郎 |
| 6 | 日本家族制度史研究 | 砂川 寛栄 |
| 7 | 家族と婚姻 | 戸田 貞三 |
| 8 | 日本家族制度批判 | 玉城 肇 |
| 9 | 家族主義の教育 | 新見 吉治 |
| 10 | 日本農村社会学原理 | 鈴木栄太郎 |
| 11 | 日本民俗学上 我国家族制度の研究
より見たる | 橋浦 泰雄 |
| 12 | 結婚と人口 | 岡崎 文規 |
| 13 | 白川村の大家族 | 江馬三枝子 |
| 14 | 日本家族制度と小作制度 | 有賀喜左衛門 |
| 15 | 家と家族制度 | 戸田 貞三 |
| 別 | 人事慣例全集 | 自治館 |

★分売不可 / 揃定価一五四、〇〇〇円（税別）

●発行

〒103 東京都中央区日本橋小伝馬町14-5
メローナ日本橋 ☎03(808)1821 FAX03(808)1822

株式会社 クレス出版

●書店名